

第11回 ふくい建築賞

受賞作品

【大規模建築部門】

《最優秀賞》

芦原温泉駅西口賑わい施設「アフレア」

設計者：(株)木下設計 木下 貴之 片山 雅哉

施工者：三越建設工業・角谷木材建設

特定建設工事共同企業体

《優秀賞》

広燃株式会社

設計者：(株)走坂建築設計事務所 水上 諭

施工者：三越建設工業(株)

《優秀賞》

道の駅若狭美浜はまびより

設計者：三橋・山口設計共同企業体+澤秀俊設計環境

小畑 陽一

施工者：技建工業(株)

《入賞》

福井県立大学小浜キャンパス

海洋生物資源学部講義棟

設計者：(株)佐々木一級建築士事務所 佐々木 晃一

施工者：(株)和晃建装

《奨励賞》

ユニフォームネクスト株式会社

設計者：(有)藤田建築設計事務所 藤田 俊則

施工者：田中建設(株)

【中小規模建築部門】

《最優秀賞》

+ヒトマメ

設計者：(株)ハッカ 丸山 晴之

施工者：(株)タイセー

《優秀賞》

株式会社坪内建設

設計者：(株)西川建築設計事務所 西川 大介

施工者：(株)村下建築

【住宅建築部門】

《最優秀賞》

M邸新築工事

設計者：出田建築事務所 出田 吏市

施工者：大須賀技建(株)

《優秀賞》

横越の家

設計者：野路建築設計事務所 野路 敏之

施工者：水上建設(株)

《優秀賞》

大野市八町に建つ伝統的民家

設計者：やすらぎの家設計工房 大月 和源

施工者：大南建設工業(株)

《入賞》

けんとくのいえ

設計者：h+ARCHITECTS 伊藤 瑞貴

施工者：木沢建築(株)

《奨励賞》

竜前の家

設計者：宮崎建設設計事務所 宮崎 雄平

施工者：(有)宮崎建設

第11回ふくい建築賞 報告

ふくい建築賞実行委員会

矢 尾 憲 一

建築士会・建築士事務所協会・JIA建築家協会の設計3団体が主催し、福井県の建築業界の人材育成を目的に創設された「ふくい建築賞」は、今年度で11回目の開催となります。募集は前回同様の昨年10月7日～12月13日までで、大規模建築部門（延べ面積が500㎡以上）6点、中小規模建築部門（同500㎡以下）3点、住宅建築部門5点の合計14点（昨年16点）の作品の応募がありました。

今年は県内建築関係10団体の協賛と県・福井市をはじめマスコミ4社の後援をいただきました。心より感謝申し上げます。

一次審査は1月15日応募書類により実施。審査は蜂谷 俊雄（としお）委員長（金沢工業大学教授）、野嶋慎二（しんじ）委員（福井大学教授）、五十嵐啓（ひろし）委員（福井工業大学教授）の3名により慎重な議論を経て、大規模部門4点、中小規模部門2点、住宅部門4点の計10点を二次審査対象作品に選びました。次に進めなかった作品から「ユニホームネクスト株式会社」「竜前の家」を奨励賞としました。

二次審査は2月21・22日の2日間にわたり審査委員が大雪のなか県内一円の現地を訪れ、直接設計者から説明を受けました。その結果、大規模部門3点、中小規模部門2点、住宅部門3点を最終審査対象作品に選びました。次点となった「福井県立大学小浜キャンパス海洋生物資源学部講義棟」「けんとくのかい」を入賞として選びました。

最終審査は3月22日（土）福井県中小企業産業大学校にて約60人の聴衆が見守る中、公開審査会が開催されました。開催に先立ち、この建築賞の審査委員長である蜂谷俊雄先生より「『時代背景と建築デザイン』～半世紀を俯瞰して」と題した講演会が行われました。日本現代建築の歩みとその時代が持つデザイン指向を、建物写真を見ながら語っていただきました。

引き続き、最終審査にノミネートされた作品の設計者による各14分間のプレゼンテーションと質疑応答を経て、公開による熱心な議論が行われた後、



審査風景

部門毎に審査委員による採点と講評が行われました。

住宅部門は「横越の家」（13点）「M邸新築工事」（13点）「大野市八町に建つ伝統的民家」（11点）となり、2作が同点のため審査委員協議の結果「M邸新築工事」が最優秀賞、他2点は優秀賞に決まる。

中小規模部門は「+ヒトマメ」（15点）が最優秀賞。「株式会社堀内建設」（11点）は優秀賞となる。

大規模部門は「芦原温泉駅西口賑わい施設「アフレア」」（15点）が最優秀賞。「若狭美浜はまびより」（13点）「広燃株式会社」（12点）は優秀賞となる。

（ ）内は獲得点数：15点満点）

審査会の最後に蜂谷審査委員長より総評がありました。特に住宅部門2作同点で最優秀賞を選んだ際の判断基準のこと、また空き家問題を解決できる民家再生の意義を教えてくださいました。

この建築賞も創設以来11年目となり、コロナ禍の影響がまだ残るのか、応募数がやや減りました。この活動は県民に理解され支持されるため、継続していくことが大切です。来年度の「第12回ふくい建築賞」は日程が設立当初に戻り、応募が8月末頃・最終審査会が11月に変わります。

会員皆様の来年度の応募をお待ちしています。



授賞者記念撮影

■ 第11回ふくい建築賞 総評

審査委員長 蜂谷 俊雄（金沢工業大学教授）

今回で3回目の審査になります。応募書類と短時間の現地審査による評価になりますが、どの応募作品にも審査からは計り知れないご苦労があったはずです。各作品の評価は審査員の見識や価値観でなされますが、その評価が絶対に正しいとは言えません。以下に本審査を通して思ったことや各作品に対する感想を記述させていただきます。

本建築賞の特徴として、応募者は福井県に在住の建築士資格を有した設計者に限定されることで、全国を対象とした建築賞審査にはない北陸特有の気候風土や価値観を含めた評価も重要であると思います。応募作品を一覧しますと、難解なコンセプトや特異な形態をアピールする作品はなく、気負うことなく自然体で設計に取り組まれているという印象を受けました。最終審査会の質疑応答でも普段着の会話が交わされ、本建築賞ならではの建築談義を楽しむことができました。審査会前の特別講演で『時代背景と建築デザイン』という話をさせていただいたこともあり、建築デザインの評価には多様な視点があることを理解されたうえで、最終審査会に参加いただけたと思います。

さて、これまでの2回の審査総評文では、本建築賞の特徴と地域性について記述しましたが、今回は応募される設計者の「常連化」について着目します。（この傾向は富山県建築文化賞でも同様でした。）地域に根差して設計活動を続けておられる設計者にとって、本建築賞は年に1回のご自身の設計活動をお披露目できる場、審査員との質疑応答によって自己研鑽する場、真摯に建築設計に取り組む仲間との交流の場であり、応募された方々はこの機会を有意義に活用されてきたと推察します。どのような活動であっても、楽しさや苦しさを語り合えるコミュニティがあり仲間がいることで、次も頑張ろうという気持ちが継続できるものです。現地審査の時に、ある設計者が、『賞をとれなくても、自身の活動を見てもらい、後継者にその姿を見せたい』と言われていました。まさに本建築賞の存在意義が語られています。一方で、常連化には同じ設計者が繰り返し受賞するという意味も含まれています。審査員は一定の期間を務めて交代することになっていますが、ご自身の設計思想や意匠の指向性が近い審査員であれば評価される可能性が高いということが言えます。珍しい事例ですが、昨年の優秀作品に選ばれた作品が、数年前に応募した時に書類審査で落選になったという話を聞きました。私はその作品を高く評価しましたが、別の審査員の審査会では評価が

低かったことになります。冒頭にも述べましたが、作品の評価は審査員の見識や価値観でなされるものです。本建築賞は築後10年間応募可能ですから、今回落選された作品にも再度挑戦するチャンスがあります。

今回の最終審査会に残った公共施設は2作品でしたが、両作品とも屋根付き広場がデザインのメインテーマになっています。雨や雪の多い北陸では、人々が集まる屋外広場に屋根をかけることが重要であることを実証しています。2007年にオープンした富山市のグランドプラザ（ガラスの屋根付広場）が公共建築賞の生活施設部門で国土交通大臣表彰を受けたことを契機に、北陸の公共建築の半屋外スペースに屋根をつける事例が増えています。今回受賞された2作品はこの考え方をさらに発展させ、屋根をかけるに留まらず、屋根のかけ方に特徴をもたせ、屋根付広場全体に独自の空間意匠を施しています。屋根付広場をどのようにつくるかが、今後の北陸の建築文化の発展の主題になりそうです。

■ M邸新築工事（住宅建築部門：最優秀賞）

応募書類にあるコンセプト模型や特異な平面形、外観写真の尖った屋根表現や窓の少なさなどから、住居に対する独自の考え方の施主と設計者のコラボで生まれた特異な住宅ではないかと思いながら現地審査に行きました。一人暮らしのご老人の住まいということで内部には間仕切りはなく、庭との関係を最小限に抑えた薄暗さ、斜め壁によって生まれる空間の抑揚、玄関・食堂・台所まわりの極小の空間操作などに、ハウスメーカーが提供する一般的な住宅への好みとは異なる対極の姿を見せてもらいました。

敷地形状から直交座標の平面計画も可能な状況において、敷地の対角線方向に軸を定めたことから生まれた特異な空間構成になっていますが、「個人住宅の設計は依頼主の夢の住まいの具現化」であるとすれば、3年間という設計期間に依頼主と建築家の間で交わされた特異な住居論があったものと推察します。次に紹介する『横越の家』と作風は対極にありますが、評価点は同点でした。再度審査員で協議をした結果、過去の最優勝住宅作品とは異なる設計手法の作品を最優秀に選ぶことで、「評価基準は一色ではない」ことを伝えたいと思いました。

■ 横越の家（住宅建築部門）

自己主張を抑えた端正な佇まいです。正面ファサードにあたる南側の外観には、スケール感、プロポーション、素材選定の拘りが感じられ、特に1階の木材とガラスによる面の分割には不要な要素を省

いて構成された緊張感があります。

玄関に入ると、通り土間風の吹抜けの演出があり、土間と広間の関係、広間と深い軒のある開口部を介した南庭との関係は、計算されつくした演出になっています。さらに開口部に着目すると、網戸・木製サッシ・障子戸を巧みに組み込むことで、季節に応じた居心地のよい居場所がつくられるように工夫されています。また、木造軸組を前面に出し、越前瓦・左官壁・木材などでの経年変化で味わいが深まる素材でまとめることで、時の流れを意識した設計意図も感じました。

設計者の説明にある「空気も音も手触りも心地よい空間」であるという意味が理解でき、斬新さを求めるのではなく、落ち着いた安らぎを求める設計姿勢から生まれた魅力が伝わってくる住まいです。

■大野市八町に建つ伝統的民家（住宅建築部門）

大雪の日到大野の古民家を訪れて、伝統的な雪国の住まいの雪に対する備えを目撃することができました。外観は雪で見えることはできませんでしたが、中に入ると和室にある大きな仏壇に圧倒されました。床の間や違い棚も含めて、伝統和風住宅の一連の空間意匠は現代の建築様式とは明らかに異なるものです。改修された部分に着目すると、改修部の木材に古色仕上げをしていませんでした。見方をかえると、新しい木材を着色せずに使っていることで、改修の歴史の変遷がわかる面白さを感じました。

説明を聞きながら、先祖から受け継いだ伝統美を守っていききたいという施主の気持ちがよくわかりました。当地域には類似の古民家が多数残っています。代々子孫が定住して受け継がれてきた古民家は、時代の変遷により、定住後継者がいなくなりつつあり、個々に古民家をどのように継承していくかという問題に直面しています。地域の優れた建築を顕彰する「ふくい建築賞」という場で、古民家継承については社会全体で考えなければならない重要な課題であることが認識されました。

■けんとくのいえ（住宅建築部門）

低価格かつ高性能な住宅を前提に、この土地ならではの環境を活かした快適な住まいを目指す設計者の姿勢が、応募資料や現地説明から伝わってきました。特に夕日を楽しむために西側に大開口部をとり、日射シミュレーションアプリを駆使し、パッシブハウスの技術や現代の素材を使って、夕日を楽しむ空間を生み出しています。また、この居心地のよい大開口部まわりに半屋外テラスを設けることで、リビングの床とのレベル差が連続ベンチとして使えるように工夫されています。日本人が古来から継承して

きた内外の中間領域に快適で魅力ある居場所を設けるという伝統を、現代的な解釈と技術で生み出しています。

■+ヒトマメ（中小規模建築部門：最優秀賞）

建築の全体から部分、さらに素材やディテールに至るまで、設計者の自身を律する作家性が漂う首尾一貫した作品に見えました。建築のつくり方として必要な個々の構成要素を吟味し、不要な建築的表現を消去し、各要素の対比的な特徴を活かす手法で魅せています。具体的には、全体は見慣れた木構造の表現ですが、内部の座屈止めの水平材と軒下空間の柱を細い鋼材にすることで、全体の木構造と対比的に際立って見えました。この部材も木材で構成することが一般的ですが、敢えてシャープな鉄材に置き換えたことで、空間に緊張感が出ています。特殊な仕上材や装飾的要素で空間を魅力的に見せようとする手法とは異なり、必用最小限の部材要素の対比的表現のみで空間に魅力と緊張感を与えています。

杉材をそのままの色で使うと赤みの目立つ部分が出てきますが、本作品のインテリアでは、すべての木部を木地を生かした拭き取り塗装の仕上になっています。シルバーグレー系の拭き取り仕上の事例は多数ありますが、本作品ではベージュ系の単色に統一され、包み込まれるようなイメージにすることで、カフェらしい暖かく優しい印象になっています。この仄々とした空間を背景として見ると、座屈止めの細い鋼材が強い線材表現として際立って見えました。

■株式会社坪内建設（中小規模建築部門）

次の時代の地方の建築土木の施工会社のイメージアップをねらった意気込みが外観意匠に表れています。木の香りが感じられる事務所を目指し、外観の輪郭と主要壁面をガルバリウム鋼板で端正にまとめ、鋼板でフレーミングされた中を木材面として特化して見せています。この木材面を大きなガラス壁面の中に自立的に見せることで、外観表現の主役の要素として軽快に魅せています。正面ファサードには、鋼材で枠どられた歯切れの良さ、軽快感とプロポーションの良さを感じます。また、中廊下型のコンパクトな平面形に対し、暗くなりがちな中廊下の上部に自然光を取り入れる高窓の工夫がなされています。

■芦原温泉駅西口賑わい施設「アフレア」（大規模建築部門：最優秀賞）

駅は交通の結節点であると同時に地域の賑わい拠点でもあります。特に当駅には温泉地の玄関口として、「記憶に残る」、あるいは「インスタ映える」華やかさが求められます。その意味において、

柱から天井まで連続して覆い尽くす木リブ材の繊細かつ優雅な表現は、金沢駅の「鼓門」と同様に、芦原温泉を紹介する貴重なシーンになると思います。この木リブ材の表現は、屋根を支える構造にも成り得る可能性はありますが、構造材になれば法的あるいは強度の問題から、このような繊細かつ優雅なイメージにはならなかったと思います。温泉が湧いて湯気が天井に広がるようなイメージのようですが、イベントのない時にも閑散として見えないように、この表現を付加することで、これ自身がこの場所の祝祭性を醸し出す演出になっています。

雨や雪の多い北陸では、天候に左右されずにイベントが開催できる屋根付広場をもつことは、都市機能の一つになりつつあります。さらに本施設には屋根付の外部広場と内部ホールがあり、状況に応じてガラススクリーンの開閉で一体的に使うことも可能になっていて、様々な運用に対応できるフレキシビリティがあります。

■道の駅若狭美浜はまびより（大規模建築部門）

道の駅として、駅前ロータリーとトイレを結ぶ大屋根広場を中央部に貫通させることで、明快な空間構成をとりながらも、各所から見える複雑なシーンの絡み合いによって、次に展開するであろうシーンをイメージしながら、次へ次へと巡ってみたいくなる魅力のある場所を生み出しています。設計コンセプトに提示された「気軽に利用できるオープンスペース」、「周辺環境に配慮した外形ヴォリューム」、「賑わいが街に溢れ出す多様な屋根スペース」、「視線が通り抜け交差することで交流が生まれる立体的空間構成」について、言葉だけでなく実際の空間体験として実感することができました。

雨や雪の多い北陸では屋根付きの半屋外スペースが有効に活用されることは実証されてきましたが、本作品では用途や使われ方によって大小様々なスケールの半屋外空間を散りばめて、個々に屋根で覆い、それらが複雑に絡み合う屋根の集合体としての魅力をファンタスティックな建築イメージで描き出しています。惜しくも最優秀賞には選定されませんでした、それに値する優れた作品でした。

■広燃株式会社本社社屋（大規模建築部門）

デザインにかかわる企業の自社ビルならではの特徴が随所に表現されたオフィスビルです。平面計画は中央部の吹抜空間を核に構成され、足羽川に面する側の2階・3階・4階には川側に屋外テラスが設けられ、街中のオフィスとしては贅沢な解放感が演出されています。このテラスの先端部の表現をさらに南側にも連続させることで、南東側から見た外観は各階の床面が積層し水平に伸びて浮遊する姿として映ります。また、中央部の吹抜空間は2階と4階で床の開口面積を絞り込むことで、縦空間の変化と抑揚を生み出しています。

建築賞の審査では、全体の形態や空間構成の特徴を見て回ることが一般的ですが、本件においては、案内される各スペースを演出する仕上材の素材や色、家具などの説明に聞き入る場面が多くありました。テキスタイルメーカーの本社ビルの設計で、デザインを厳しく吟味する能力のある社長のもとでの素材や家具の選定ということで、随所にデザインの見せ場がありました。

■福井県立大学小浜キャンパス海洋生物資源学部講義棟（大規模建築部門）

川崎清氏設計の既設キャンパスの増築棟ということで、建築イメージの連続感を大切にされています。確かにコンクリート打ち放し仕上げの外観を見ると同一設計者の設計にも見えます。施設の中心にある自由に使えるイノベーションフォーラムは、コンクリートの仕上げの厳しさを和らげる木材の天井意匠が特徴です。この空間の両端には良好な自然風景が眺められる開口部があります。外を見渡して気候の良い時期をイメージすると、学生たちが寛げる屋外空間が広がっていることがわかります。この内外の中間領域に下屋的な庇空間を付加していれば、景色を眺めて寛げる居心地の良いスペースが生まれたのではないのでしょうか。継続する建築イメージを守りながらも、新しい時代感覚が求めるキャンパスライフの魅力を付加していくことも重要ではないかと思いました。

■第11回ふくい建築賞 講評

審査委員 野嶋 慎二(福井大学教授)

人口減少、多発する災害、環境負荷の課題、デジタル化の進展による暮らしの変化など、我が国の建

築を取り巻く社会情勢は急速に変化している。建築が社会に働きかけ、地域の持続可能性にいかに関与するかも、建築のあり方として重要となってきた。今回発表された候補作品は、場所の特性や機能の特性、暮らし方を丁寧に読み取り、それらを生か

して外観や内部空間の計画に丁寧に反映させている作品が多く、質の高いものであった。各々の受賞作品について感想を述べたい。

大規模建築部門

1. 芦原温泉駅西口賑わい施設「アフレア」

駅は鉄道から降りて街へと誘う起点でもあり、鉄道で出発する人を街から迎え入れる滞在の場所でもあり、来街者にも地域住民にも重要な役割を果たす。街と空間的にどう繋がるかが重要である。

柱から天井に温泉が溢れるイメージでデザインされた木製の組子のような美しい格子が、高い天井全体を覆っている。その場所は内部と外部がガラスで仕切られ、交流のための大空間となっている。その下にいると独特の居心地が感じられ、さまざまな交流も生まれ、駅から街への期待感、街から駅へのお迎え感を助長させてくれる。街、広場、ホール、2階、3階交流・子供の施設、駅コンコースとのつながりもうまく計画されている。さらにアプローチ道路からのアイストップに位置し、建物全体の壁面は曲線のガラスで追われ、シンボル性があり街の景観を作っている。

街とつながり、交流、景観など駅の持つ機能を増幅し、人々を魅了する建築である。

2. 美浜町道の駅 若狭美浜 はまびより

この施設は、美浜駅に隣接する道の駅であり、単なる休憩所ではなく、来街者も地域住民の集う交流の場所、物産、託児室、チャレンジショップ、スタジオなど、地域のまちづくりの拠点としての役割も担っている。木質の屋根が幾重にも重なる建築である。屋根の下には屋外広場、テラス、内部空間など様々な質の空間と様々な機能により、それぞれ個性的な居場所ができています。そしてそれらの場所が有機的に立体的につながりヒューマンスケールの空間が連続した独自のシークエンスと回遊性を作り出している。また屋根と屋根の隙間に風が抜けて気持ち良く、全体として軽やかに感じられる。こうした空間構成は、4mスパンの柱を細く軽やかにし、木を多く使うことなどの建築技術により実現されている。

こうした屋根が重なる空間構成が駅や街からの良好な景観も作り出し、まちづくりの拠点として人が集う優れた空間が作られている。

3. 広燃株式会社 本社新社屋

この施設は、テキスタイルのメーカーの社屋であり、主に開発課、営業課、ショールームなどの機能を持つ。中央の4層の吹き抜けの階段室が左右のパ

ブリック空間とプライベート空間を明確に分ける役割を持ちながらも、居心地のよいコミュニケーションの場所となっており、立体的につながっている。

道路から1階上がるごとにセットバックされた建物であり、街並みに対してスケールダウンされた良好な景観を意識している。またセットバックを利用し、階ごとに個性ある気持ちの良いテラスが設けられ、様々な使い方がなされている。全体的にガラスを多く使い、明るい社屋である。

社屋という、どちらかというと機能重視の閉鎖的になりやすい施設であるが、個性ある共用空間を豊富に点在させそれらを立体的につなぎ、使いやすく、仕事したくなる建築であり、外部との良好な関係性も意識した建築と言える。

4. 福井県立大学小浜キャンパス海洋生物資源学部講義棟

この施設は自然豊かな小高い丘の大学構内に建つ小規模な講義等であり、既存の講義等とつながった配置となっている。平屋で分節されたコンクリート打ち放しの外観は、周辺の自然と調和し、スケール感が良い。講義室をつなぐホールはこの建物の中心であり、大きな開口部により自然景観を取り入れており、展示や休憩など多用途に使われる。天井の県産材の杉を用いた木格子は、設備機器を隠す役割も果たし、このホールの空間を特徴づけている。そこからハイサイドライトが降り注ぎ、気持ちよく過ごせるホールとなっている。

中小規模部門

1. +ヒトマメ

この施設は大豆食品とその食文化を志向するための建築として建てられた。

室内は、垂直の木柱と細い水平の座屈止めで構成され、整然とした軽やかな内部空間を実現しており、自然食品を扱う内部空間にふさわしい。

登り梁の美しい木組の寄棟の屋根が室内を覆っており、屋根の下内部空間は床暖房で暖かい。建物の周囲に周る深い軒先空間は、客人を迎え入れる役割がある。さらに雪の季節は、屋根の融雪装置は雪を建物の周りに落とし、外部と内部の緩衝帯として重要な役割を果たしている。寒い季節に人が立ち寄りたくなる空間であり、勝山の気候風土に適した優れた建築である。

2. 株式会社坪内建設

勝山市の郊外に建てられた建設会社の新社屋である。木造で建てたいという施主の要望に丁寧に応えている。建物の色を抑え平屋にすることで周辺の山々の風景と調和させている。一方で、階高を少し

高くすることで、ハイサイドライトを多用し、明るい内部空間を実現している。社屋としてシンプルで使いやすいプランの中で、木材をうまく配置した、気持ちの良い建築である。

住宅建築部門

1.M邸新築工事

敷地に対して斜めの軸線を設定し、そこを細長い居間兼廊下としている。その軸を中心に各部屋が設けられ、不要な扉はなく、ほぼワンルームの室内空間となっている。全体的に照明を落とし、木材と土壁で覆われた空間は、落ち着いた住宅空間となっている。施主との対話を綿密に行い、3年間設計期間を要している。外観もこの軸線を活かして、エッジの効いた外観であり、街の景観にアクセントを与えている。施主の生活スタイルと合致した建築の面白さを体感できる。

2.大野市八町に建つ伝統的民家

集落の伝統的民家を後世に継承させていくことは、持ち主だけでなく地域社会にとっても重要なことである。この作品は、施主の生活を大切にしながら耐震性能の向上と住環境の改善を段階的に行いながら、住みながら改修する方法を示している。この建物は福井の伝統的な田の字プランであり、田の字の部分は既存の空間と材料を生かした改修、水回り部分は生活利便性を生かした改修、2階は最小限の改修というように、その場所の特性と使い方に応じて、改修方法を変えることで、全体として古民家としての価値を保ちながら建物を継承させる方法を示していると言えよう。

3.横越の家

この住宅は、間口が狭く奥行きの長い敷地や周りの状況をよく読み取り、これらを活かした住宅を作っている。この敷地形状に対応させるように町家の空間構成を住宅に取り入れ、また隣の美しい蔵を借景とした中庭を作るなど、丁寧な設計を行い、質の高い住環境を実現している。

居間は、南の庭とぬれ縁やデザインされた障子でつながり、また中庭、和室ともつながり、大変居心地が良い。

漆喰と和紙と木材を組み合わせたシンプルな材質を用いて、天井高など木目の細かい計画を行うことで落ち着いた気持ちの良い住宅が実現している。

4.けんとかのいえ～夕日を楽しむ家

この住宅は間口が狭く奥行きの長い小規模な敷地に建ち、南北方向の隣棟間隔は狭い。敷地の西側には隣家の広い庭があり、遠方に山並みが広がる。このような典型的な都市部の敷地条件を上手く読み取り、西側の開口を大きく取り、遠方の山並みの景観を取り入れる住宅を計画している。夕日を楽しむために西日のデメリットをパッシブハウス設計+高機密高断熱の環境性能の向上によって解決している。またシンプルで汎用性のある平面計画とともに低価格で高性能な半規格化住宅を目指している。福井における都市型住宅のあり方を提示した優れた住宅であると言える。

■ 第11回ふくい建築賞 講評

審査委員 五十嵐 啓（福井工業大学教授）

住宅部門

1.M邸新築工事

住まい手の多様な要望に徹底的に向き合い、時間をかけて解きほぐし、建築としてまとめ上げた設計者の力量が十分に発揮された作品だと思う。住まい方そのもの、住宅という建築形態、周囲との関係性など、自由なはずの建築を既成概念で縛っていたことに改めて気づかされた思いである。規制強化の時世であるが、住まいの可能性はまだまだ広いことを示してもらった。

2.大野市八町に建つ伝統的民家

伝統的たたずまいの民家が点在する大野市八町地区であるが、この美しい風景を継承していくには、理解ある住まい手とそれに応えることのできる技術と技術者がそろっていなければ困難である。今回のような事例が多く紹介され実績を示すことで、少しでもその助けになるのではないかなと思う。10年スパンで取り組まれた建築主、設計・施工に携わられた方々に敬意を表する。

3.横越の家

現地審査の際、ご家族の方がこの家での暮らしを自分のものにして楽しんでいらっしゃる様子が印象に残っている。戸建てとしては一般的な40坪弱だが、開口の位置、高さ、意匠などがいい意味でおおらかで、それがゆったりした心地よさを生んでいる

と感じた。使われている自然素材が歴史を感じさせる周囲の環境と融けあい、控えめながらも存在感のある家となっている。

4.けんとくのいえ

住宅の温熱環境に関する設計者の豊富な経験と実績によって実現した住宅といえる。敷地条件を読み切った上での西側大開口という選択は、4年間のくらしの中でその正しさが証明されていた。住宅に関わる種々の社会問題に対して独自のマニフェストを掲げ取り組まれている設計者の、一連の作品として都市型のくらしへの提案が具現化されている。

中小規模建築部門

1.+ヒトマメ

寄棟のシャープな屋根がかかる外観が目を引く、美しい建物である。スチール柱で支えられた深い軒は雪深いこの地に適応し、夏場も含めて安定した環境をもたらすと同時に、室内の賑わいを周囲にあふれさせることを可能としている。内部の表しの構造材も心地よい緊張感を持ってすっきりとまとめられており、店舗のコンセプトと一体となった建築となっている。

2.株式会社坪内建設

車寄せと門型フレームで構成される正面のファサードが印象的なデザインである。左右・上部のガラス面は、晴天時は応募資料のように周囲の豊かな自然を写し出し一体化する。スクエアな外観からは木造という印象は薄いですが、木が多く採用された内部には明るく穏やかな空間が連続している。建設業で働く若い世代に向けたメッセージを良く表現している社屋となっている。

大規模建築部門

1.広燃株式会社

建物内を垂直方向に貫く吹抜けと、大胆なセットバックによって各階に広がる屋外デッキが印象的で

あった。部署間のコミュニケーション創出やスタッフの働きやすさに対する企業としての姿勢が随所に見られ、由緒あるテキスタイルメーカーとして積み上げられてきた重みと時代の変化に対応する柔軟さが、オーナーと設計者の共同作業によって具現化された建築である。

2.福井県立大学小浜キャンパス海洋生物資源学部講義棟

外部は、周囲の既存校舎を意識したコンクリート打ち放しの堅牢で静寂な印象にまとめられており、対象的に内部には学生・地域・高校生の交流の場として、イノベーションフォーラムと名付けられた木格子や和紙照明による柔らかかにぎやかな空間が展開される。春からの小浜キャンパスで学ぶ学生達の生き生きとした姿が想像される建築となっている。

3.道の駅 若狭美浜 はまびより

大小の屋根が重なり合う外観がとても魅力的で、R27や美浜駅ロータリーからの南北軸から人々を引き付け、屋根下の屋外空間での賑わいが、周囲にあふれ出る様子が想像される建築である。様々な使い方を受け入れるおおらかさがこの建物の魅力であり、使う側からもアイデアの出し甲斐があるのではないだろうか。

4.芦原温泉駅西口賑わい施設「アフレア」

芦原温泉駅の玄関口に相応しい祝祭性にあふれた美しい空間を、限られたコストの中で実現されたことは設計者・施工者の大変な努力の賜物であると思う。安全性や見えがかりに配慮された木格子は、照明器具などの設備機器やカーテンウォールとの取り合いなどが違和感なく実現されており、賑わいを生み出す核を求めたプロポーザルの趣旨を見事に実現していると言える。

■ 第12回ふくい建築賞作品募集 ■

応募申込: 2025年6月9日(月)～8月22日(金)

応募申込書・建築概要書を提出してください。(FAX・メール可)
詳しくは募集リーフレットをご覧ください。

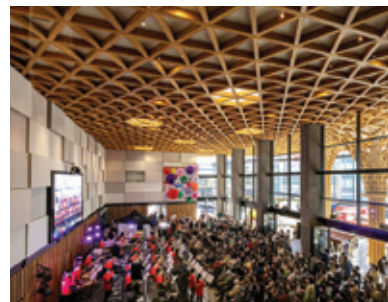


【最優秀賞】 芦原温泉駅西口賑わい施設
「アフレア」

設計監理：(株)木下設計
木下貴之・片山雅哉

施工：三越建設工業・角谷木材建設
特定建設工事共同企業体

建築位置：福井県あわら市
工期：'21年6月～'23年3月
構造規模：鉄骨造・地上3階
敷地面積：1,746 m²
建築面積：1,441 m²
延べ面積：1,948 m²



「賑わいをつくる」あふれる源泉を木で表現する
北陸街道の宿場町として栄えていたが、駅周辺の賑わいは失われ、閑散としており、暗く・憂鬱な雰囲気漂っていた。

福井の北の玄関口として、「賑わいを生み出すこと」を最重要視した。ただあわら市のような地方都市では、水平垂直の均質な空間は、気持ちが固くなり、「わざわざ行く」「賑わいを生む」ことに繋がらない。

むしろ、人の存在を感じられる、期待を持てる温かい地産のマテリアル、そして「元気があふれる、力があふれる」「あふれ出る温泉の源泉や湯気のような芦原温泉らしさ」というやわらかな表現を建築として具現化したいと考えた。温かみのある地産材の木材を主としながら、コストとデザインの両立を重視した。曲線材を減らし、内装制限は避難安全検証法により緩和しながら、コスト安かつ立体的で力強い空間を目指した。また、季節や時間に応じて色が様々変わる、「温泉街のぼんぼり」を引用した照明は、驚きと期待感・温かさを感じてほしかった。建物の形・色・光が人の印象に強く残り、地域に強固に結びつき、賑わいを生むことに繋がる。あそこに行けば誰がいる。人の活動の熱気や活気が、あふれる源泉のように、そして勢よく湯気が立ち上がるような芦原温泉らしい賑わいの風景になったと感じている。

【優秀賞】 広 燃(株)

設計監理：(株)走坂建築設計事務所
水上 諭

施 工：三越建設工業(株)

建築位置：福井県福井市
工 期：'20年2月～'22年11月
構造規模：鉄骨造・地上4階
敷地面積：1,201 ㎡
建築面積：724 ㎡
延べ面積：2,014 ㎡



創業95年を迎える福井の老舗テキスタイルメーカーの本社移転計画である。老舗企業の伝統と、更なる発展の足掛かりとなる建物を要求された。立地は住宅街の中にあり、近隣への配慮と足羽川の桜並木との景観の調和が求められた。設計・施工の過程で、藤原社長のこだわりと妥協を許さない姿勢は建物の前に訪れるだけで感じる事が出来る。魂の宿る建物を始めて設計したと感じている。



【優秀賞】 道の駅若狭美浜はまびより

設計監理：三橋・山口共同設計企業体
+ 澤秀俊設計環境

施 工：技建工業(株)

建築位置：福井県三方郡美浜町
工 期：'22年6月～'23年6月
構造規模：S造・地上2階
敷地面積：7,035. ㎡
建築面積：1,421 ㎡
延べ面積：1,840 ㎡



北陸新幹線が開業する敦賀、観光名所：三方五湖をつなぐ東西軸上の主要施設として本道の駅は整備された。広場を分散させ、様々な目的・機能に応じた屋根を大らかに重ね合わせることで、人々が立ち寄りやすく、開かれた屋根下空間を創出した。要求された屋根付の公共空間に対し、用途や使われ方によって大小様々なスケールの半屋外空間を計画し、それに対応するように屋根を分割することで、隙間から光や風を取り込み、人々の心地良い居場所となる。





写真：市川靖史

【最優秀賞】 十ヒトマメ

設計監理：(株)ヒヤツカ
丸山晴之 野澤真佑
施工：(株)タイセー

建築位置：福井県勝山市
工期：'22年10月～'23年7月
構造規模：木造・地上1階
敷地面積：1,484 m²
建築面積：220 m²
延べ面積：168 m²

十ヒトマメは、福井県勝山市のきざみ油揚げ製造業・山一食品による新規事業である。地域との接点となる豆乳カフェを通じて大豆文化を発信し、企業の魅力高めることを目的としたプロジェクト。雄大な勝山の大地に、雪に呼応し、人々をやさしく包む大屋根を架け、地域の風景の一部となる建築をめざした。

【優秀賞】(株)坪内建設

設計監理：(株)西川建築設計事務所
西川 大介

施 工：(株)村下建築

建築位置：福井県勝山市
工 期：'22年4月～'22年11月
構造規模：木造一部鉄骨造・地上1階
敷地面積：1,683 m²
建築面積：338 m²
延べ面積：305 m²



「次の世代に良い建物を残していきたい」という企業理念に基づき、働く人々が誇りに思える社屋として、木・鉄・コンクリート・ガラスをシンプルかつ素直に表すことで、素材そのものの魅力を引き立てている。

県産材を多用し、木に囲まれた安心感のある木造社屋でありながらも、木造＝住宅という既存のイメージを払拭するデザインとなっている。



【各部門・入賞／奨励賞】

【大規模建築部門】

【入 賞】 福井県立大学小浜キャンパス
海洋生物資源学部講義棟



設計監理：(株)佐々木一級建築士事務所 佐々木 晃一
施 工：(株)和晃建築

【住宅建築部門】

【入 賞】 けんとくのいえ



設計監理：h+ARCHITECTS 伊藤 瑞貴
施 工：木沢建築(株)

【奨励賞】 ユニフォームネクスト(株)

設計監理：(有)藤田建築設計事務所 藤田 俊則
施 工：田中建設(株)

【奨励賞】 竜前の家

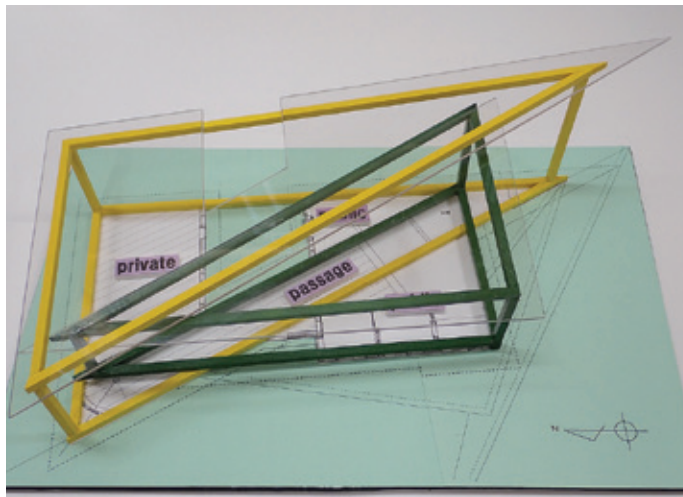
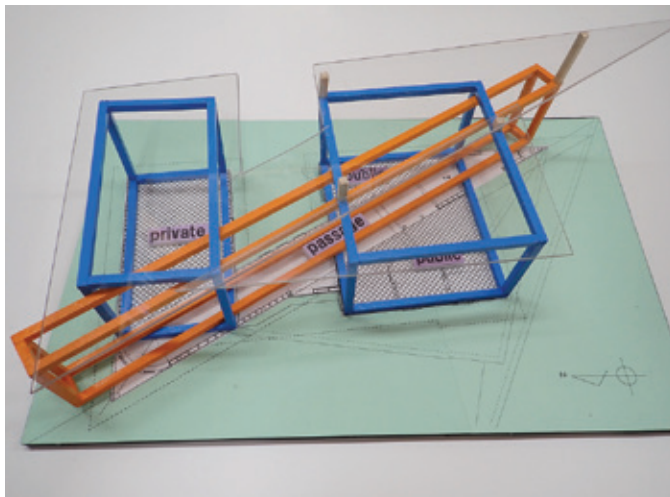
設計監理：宮崎建設設計事務所 宮崎 雄平
施 工：(有)宮崎建設



【最優秀賞】M邸新築工事

設計監理：出田建築事務所
施工：大須賀技術(株)

建築位置：福井県福井市
工 期：'22年7月～'23年5月
構造規模：木造・地上1階
敷地面積：293 m²
建築面積：74 m²
延べ面積：68 m²



コンセプト模型

南側に道路があるので、南に玄関パブリック空間（ブルー）・北にプライバシー空間（ブルー）を設け、これを結ぶ形で北西と南東に軸線である廊下（オレンジ）で繋いだ。
屋根骨格フレームを1：2： $\sqrt{5}$ の大小三角形で造り、交わった部分が軸線の廊下である。

【優秀賞】横越の家

設計監理：野路建築設計事務所
野路 敏之

施 工：水上建設(株)

建築位置：福井県鯖江市
工 期：'21年5月～'21年12月
構造規模：木造・地上2階
敷地面積：412 m²
建築面積：99 m²
延べ面積：130 m²



【優秀賞】大野市八町に建つ伝統的民家

設計監理：やすらぎの家設計工房

施 工：大南建設工業(株)

建築位置：福井県大野市
工 期：'23年5月～'23年10月
構造規模：木造・地上2階
建築面積：190 m²
延べ面積：298 m²

